

タルバガタイ参贊大臣宛文語カザフ語文書1種

杜山那里
(デュセンアイル・)
アブディラシム)

ジュンガル勢力が平定されてまもない1757年、カザフと清朝との公式の関係が結ばれ、両者の間の官貿易が円滑に発展していく。このような友好的関係の樹立にともない、カザフの遊牧民たちは、一度ジュンガルに占領された郷土に帰還しつつ比較的安定した生活を送るようになった。カザフの支配階級であるハン、スルタンらは清朝と交渉を開始した直後、清朝へ使節団を派遣し、積極的に清朝との関係強化に取り組んだ。このような遣使はその後もしばしば行われ、カザフ側の意思を記した書簡などが清朝に送られ、同時に、清朝もこの時期を皮切りにカザフに関する情報や、書簡への回答などを数多く記録するようになった。その多くは、やはりカザフ草原の中部、ジェトウスウ（セミレチエ）地方を根拠地とする大・中ジュズ¹⁾に関する満洲語・漢語編纂記録であり、従来の研究は主として漢語による編纂記録に基づいて行われてきた²⁾。だが、近年はこうした編纂記録のもとになった文書史料、すなわち現在北京の第一歴史檔案館に所蔵される満洲語と漢語の軍機処録副奏摺を利用した研究へと移行しつつある。

もともとカザフのハンやスルタンたちから清朝の辺境当局³⁾または皇帝のもとに送られてきた文語カザフ語文書とそれらに関する満洲語奏摺は清朝の関連機関に残されており、その実態については『清代辺疆満文檔案目録』（以下、『目録』と略する）によってかなりの情報が得られる。しかし、先行するカザフ史研究は、これらの文書史料の存在を承知していたが、

1) jüz (ジュズ) とは、地域的行政的に区分されたカザフの部族連合体であり、大・中・小の三つのジュズに分かれる。ジュズの発生時期についてはいまだ研究者は合意に達していない。例えば、三つのジュズがいつ出現したかについて現時点では説得力がある妥当な見解はない [QT: 309]。ジュズの出現の時期と状況は謎に包まれているという指摘 [宇山1999: 97] もなされている。

2) その好例として佐口1963, 1986; Millward 1992 が挙げられる。

3) 本稿に用いた「辺境当局」とは、例外なくイリ將軍、タルバガタイ参贊大臣などの清朝政府が現地に派遣した官吏らを指す。ジュンガルを平定した後期清朝は、イリに惠遠城を築き、そこに総統伊犁等処將軍を置いて新疆全域の統治に当たらせた。これは清朝時代に設置された新疆の最高軍政長官であり、一般に「伊犁將軍」(イリ將軍)と略称される。イリ將軍の配下には、イリ、タルバガタイとカシュガルに駐屯する3名の参贊大臣が置かれた。これらのうち、カザフと密接な関係があったのは、イリ將軍、タルバガタイ参贊大臣とその部下にある各官吏らである。

これを収集、解読する努力を怠り、これまでその数や内容は殆ど明らかにされてこなかった。このような背景において、筆者は2009年10月半ば以降、上記檔案館で調査を実施し、満文録副奏摺の文書類のうちに、文語カザフ語文書154点を発見した⁴⁾。ただし、この内の5点はカザフに与えられた清朝皇帝の勅書であり、それ以外がカザフからの来文である。特記すべきことに、今回の調査では、満文録副奏摺の原文の閲覧が不可能であったため、マイクロフィルムのみをもとにして行ったものであり、遺漏が残る可能性も否定できない。また、奏摺に添付されている、或いはそうではないカザフからの来文の原文書についての『目録』の情報にはやや不備があり、『目録』から漏れているものや、逆に『目録』に記載されているが、公開されている檔案館のマイクロフィルムには見あたらないものも散見されることが、筆者の調査・研究によって判明した。

ここで紹介する1通の文語カザフ語文書は、筆者が上記檔案館で調査した際に発見した文書群の中の一点であり⁵⁾、それに加え、この文書の満洲語訳とカザフ宛満洲語返書を共に提示した。史料的価値とは別に、この文書には18世紀文語カザフ語資料としての重要性が認められることは言うまでもない。一方、原文書とその満洲語訳の対比は、カザフ・清朝関係史研究をより正確に行うために欠かせない基礎的な作業であり、今後更に関心を払わなければならない。また、先行研究では、カザフの清朝向け遣使活動について言及した際に北京に訪れた使節団の回数とそれに関する情報のみを提出し⁶⁾、清朝の辺境当局、すなわちイリヤタルバガタイに派遣された使者らについて一切論じていない。従って、この文書は当時のカザフ遊牧社会の実態、とりわけ清朝との交渉の経緯を解明するための重要な史料である一方、カザフが清朝の辺境当局に向けて遣使した事例を裏付ける好例でもあり、注目に値する。

原文書はカザフの王ハンホジャがタルバガタイ参贊大臣に宛てたものであり、乾隆55年10月20日(西暦1790年11月26日)付けの代理タルバガタイ参贊大臣特成額の奏摺に添付されている。奏摺は『目録』第9冊(新疆巻4)第1959ページに収録されており、原文書(マイクロフィルム)149:451-464、満洲語訳・返書(マイクロフィルム)149:451-

4) このうち、清朝皇帝と辺境当局の官吏らへ同時に送られた文書も含まれており、それらを別々の文書として扱っている。なお、これらの原文書のうち、14点の紹介・研究が既に公刊されており、具体的にエルキン氏2点[阿力肯2006, 2009]、バクト氏2点[QTQD3]、野田仁氏・小沼孝博氏9点(エルキン氏の2点を除く)[Noda & Onuma 2010]と筆者1点[Düysenäli 2009]がある。

5) 文書は、2009年度京都大学大学院文学研究科に提出した筆者の博士論文「18-19世紀文語カザフ語文書の歴史文献学的研究」に引用されている(附編第31文書、ファクシミリ付き)。文書の校訂や転写に関しては指導教員の濱田正美先生にご指導いただいた。ここに記して謝意を表したい。

6) 佐口透氏はカザフの遣使入観について早くから研究を行っており[佐口1963:300-303]、厲声氏は、氏の研究の遺漏を補っている[厲2004:127-129]。また、カザフスタンのバクト氏の言及[QTQD2:55]のほか、小沼孝博氏がより詳しい情報を提示している[Noda & Onuma 2010:156-159]。

466～471である。

本稿では原文書の校訂テキスト、または原文書と満洲語訳・返書の転写、翻訳、注釈と解説の順に記載する。原文書には、例えば、書き忘れた語をその行の上に記したり、また、本来書くべき箇所の都合上、その語を行の上に書いたりした例が見られる。校訂の際は、こうした語をもとに戻して表記した。文書では印章が最後の2行の後ろに押されているため、一貫して校訂したテキストのむすびに記した。原文書における固有名詞、すなわち地名、部族名と人名のカタカナ表記については、現代カザフ語の綴り字法にもとづいた。他方、ezinを「エゼン」、満洲語表記 bithe を「文書」に統一した。転写における*は満洲語文書で強調されているところを示す。訳文の〔 〕は訳者が補った語であることを指す。

I 原文書とその満洲語訳

1 原文書

【校訂テキスト】

(1) بیرنیک یوزین کون نینک کوزین بلیب تورغان ازین بوغدا خان نیک ایسان لیکن تلامیز کوب (۲) یلارکه کوب آی لارکه سیر یلیدین بیرى تورامیز اول بولغالی قارامیز قول بولغالی یرلیمیز باى بولغان (۳) یالغوزومیز کوب بولغان بورت میز تیج بايسالدى بولوب تورغان تارباغاترنی بلیب تورغان (۴) خوب امبان باتور امبانیک هم ایسان لیکن تلامیز کوب ای لارکه کوب یلارکه (۵) بوغده ازین خان نینک قیرانی اول فیز آتامیزکه من کی فاضاق خان حواجه وانک آغا اینی میزکه (۶) سیر یلیدین برى یلدا کوب قى ران لار تیکیب تورادور خان نینک بو قیرانیکه آغا اینی میز بلان (۷) قوائیب باش اوروب تورامیز بو اولکان دولت که قاجاندا بولسه خیزمت کارمیز اوج یلیدین (۸) برى جینک کیز جغانده اوت جیق مادی یری ایسیغ بولدی بو یل توبته اوت جیق مادی بوفى تاجنى (۹) سن بو یرنى تیلی تین تاکینى یغیب تور دیب قویوب من کی خان خوجه وانق اوزوم قریوقه بازارکه (۱۰) کیلیب توردم اوزومنى مورونوم ایچیدا توردم بو یردیکی تیلی تین تنکنى من یعی دیب قریوقه بازاردا (۱۱) توردم اوج یلیدین برى جینک کیز جغانده مالیمیز کوب اولدی اوتی یوق بولدی شونینک اوجون (۱۲) قریوقه بازارکه کیلیب شو قریوقه بازارنى مکان قیلیب توردم یاز بولسه جینک کیزکه ینه کوچوب (۱۳) کیتامیز زاو شیطان بو یمان تین تاک فاضاق اولکان حان نینک قارا یولیدین اوت کودی بولسه شونى قارا (۱۴) ول منکه هیداب جیقاریب برینکیز من اوزوم بلاى (۱۵) میرزاییک عقلاقجی بیش کیشی یوباردوک

[مهر] خان حواجه بمادر سلطان

【転写】

(1) Yerning yuzin, kunning kuzin bilip turğan ezin boğda hanning esänlikin tilärmiz köp (2) yıllarga, köp aylarga. Siyir yilidın beri törämiz ul bolğalı, qaramiz qul bolğalı yarlımiz bay bolğan, (3) yalğuzumiz köp bolğan, yurtmiz ti[n]č baysaldı bolup turğan. Tarbağatarnı [sic. <Tarbağatay] bilip turğan (4) hub amban, batur amba[n]ning ham esänlikin tilärmiz köp aylarga, köp yıllarga. (5) Boğda ezin hanning qayranı Aul Fayz atamizga, menki qazaq Hān Hwāja wang, ağa-inimizgā (6) siyir yilidın beri yilda köp qayranlar tigip tura dur. Hanning bu qayranıga ağa-inimiz bilän (7) quwanıp, baş urup turamiz. Bu ülkän dawlatga qaçanda bolsa hizm-

atkärmiz. Üç yıldın (8) beri Činggiz Čaganda ot çıqmadi, yeri issig boldi, bu yıl tupta ot çıqmadi. Bofı tajini (9) sen bu yerni teli tentäkini yigip tur dep qoyup, menki Hân Hwaja wanq [sic. <wang>] özüm Qarabuqa Bazarga (10) kelip turdum, özumni murunum içidä turdum. Bu yerdiki teli tentangni [sic. <tentäk>] men yigay dep Qarabuqa Bazarda (11) turdum. Üç yıldın beri Činggiz Čaganda malimiz köp öldi, otı yoq boldi. Šonıng üçün, (12) Qarabuqa Bazarga kelip, šu Qarabuqa Bazarnı mekän qilip turdum. Yaz bolsa Činggizga yenä köçüp (13) ketämiz. Zā-u [sic. <zāwar?>] šaytan bu yaman tentäk qaзақ ülkän hānning qara yolıdın ötködi bolsa, šonı qarā- (14) wul manga haydap čıqarıp beringgiz, men özüm biläy. (15) Mırzabek ‘aqalaqçı [sic. <aqalaqçı>] beš kiši yübärdük.

[muhr] Hân Hwaja Bahādur Sultān

【翻訳】

(1) 天下、太陽の光を支配するエジェン・ボグダ・ハンの安寧を〔我々は〕願う、多(2) 年多月を通じて。丑年以来、我々のトレが〔エジェン・ボグダの〕子に、我々の属民が〔エジェン・ボグダの〕しもべになって以降、貧しいものが豊かになり、(3) 乏しいものが増え、属民は安定して豊かになっていた。タルバガタイを管理する(4) 参贊大臣、バトゥル大臣の安寧をも願う、多月多年を通じて。(5) ボグダ・エジェン・ハンの賜物は父のアブルフェイズと、カザフのハンホジャ王である私と、兄弟に(6) 丑年以来、毎年多く送られている。ハンのこれらの賜物を受け取った我々は兄弟と共に(7) 喜んで〔ハンに対して〕叩頭をしている。この大きな幸運に対して常に奉仕者となっている。3年(8) 以来、チンギズ・チャガンに草が生えず、暑かった。今年は更に草が生えなかった。ポプ・タイジに(9) 「お前はこちらの悪党たちを治めよ」と命じ、私ハンホジャ王はハラブハ・バザルに(10) 移牧してきた。我がムルンの中に来ている。こちらの悪党たちを、私が治めようとハラブハ・バザルに(11) いる。3年以来、チンギズ・チャガンで我が家畜が数多く死んだ。草が生えなかった。従って、(12) ハラブハ・バザルにやってきて、ハラブハ・バザルを根拠地にしている。夏になるとチンギズ〔・チャガン〕に再び移牧して(13) いく。下僕の、不屈き者であるこれらのみっともない、紛争を引き起こすカザフ人がもし、大ハンの大道を越えたならば、その者たちを(14) 哨兵は私に引き渡して欲しい、私自身が処分したい。(15) ミルザベク・アカラクシ〔など〕5人を遣わした。

【印影】 ハンホジャ・バハドゥル・スルタン(文語カザフ語)

【注釈】

(1) ezin bogda hān. 清朝皇帝。ここでは乾隆帝を指す。

(2) siyir yılı. カザフ民間暦丑年。西暦1757年。これは文語カザフ語文書によく現れる用語であり、カザフと清朝の公式な関係が結ばれた年代を指す。

törämiz ul bolğalı, qaramız qul bolğalı……慣用語。この törä/töre は文語カザフ語

文書に徴する限りでは、ほぼ排他的にカザフのハン一族及びその嫡裔を指す。qara は「黒い」の意。転じて qara haliq (属民) を表す。

(4) ħub amban. < 満洲語。hebei amban. 参贊大臣 [五体, 1212]。当時の代理タルバガタイ参贊大臣は特成額。

batur amba[n]. 『五体』には、この職名が見当たらない。しかし、この文書の満洲語訳(後出)にはそのまま batur amban となっているのは興味深い。いずれにしても、カザフ人が便宜上 meyen i amban (領隊大臣) を「バトゥル大臣」と呼んでいたと考えられる。

(5) qayran. 賜物。文語カザフ語文書の場合、カザフのハン一族は北京、イリあるいはタルバガタイに貢物として送った馬を biläk/bilak (貢馬) と呼んでいたに対して清朝側から送られた賜物を qayran と呼び分けた。

Aül Fayz < Abū al-Fayz (?-1783)。現代カザフ語で Äbilpeyiz と表記される。アブルマンベツト・ハンの次子。『事宜』(巻4-24)によれば、1764年にアブルフェイズが初めて清朝から王の爵位を受けたという。

Hän Hwāja wang (1750?-1799)。現代カザフ語で Hanqoja と表記される。ハンホジャは、一般にアブルフェイズの長子として知られているが、実際はそうではない。『識略』(哈薩克世次表)によれば、ハンホジャは、西部カザフのバラクの子で、バラクの死後、妻が2歳のハンホジャを伴ってアブルフェイズに再嫁したという。彼はアブルフェイズの長子として育てられ、父の死後(1783年)、彼の後を継いで右部カザフの実権を握り、清朝から王の爵位を受けた。彼の生年については明確な記録がないが、恐らく1750年に生まれ、1799年に49歳で死去したと筆者は推測している [Düysenäli 2009: 55]。

(7) bu ülkän dawlatga qačanda bolsä ħizmatkärmiz. ここの dawlat は「お陰」、「幸運」の意。

(8) Činggiz Čagan. 史料を見る限り、チンギズ・チャガンはアブルフェイズ一族とその嫡裔たちの根拠地であると思われる。チンギズ・チャガンの地点について佐口透氏は Levshin, Pelliot 両氏が言及しているものの、正確な地点は示していないと指摘し、この地方は、恐らくチュー河とイリ河下流域の間の草原地帯に位置すると推定している [佐口1963: 286]。Činggiz Čagan は、漢文史料で「慶吉斯」、「青可斯察漢」、「慶吉斯察罕」、「誠格斯察幹」などの各種の形で記録されている。チンギズ・チャガンに関するカザフ側による記録は殆どないが、この文書は唯一の史料として挙げられる。この文書はまた、近現代ジェットゥスゥ地域、特にバルハシ湖周辺の気候変動による旱害に関する情報を提供してくれる唯一の文語カザフ語文書であり、史料価値は極めて高い。いずれにしてもチンギズ・チャガンが雨水の少なく、乾燥していた地域でもあったことは、この文語カザフ語文書によって裏付けられる。ただし、文書には「夏になると再びチンギズ・チャガンに戻る」という記述があるため、この地域はハラブハ・バザルに比較的近いバルハシ湖の西北に位置する乾燥地帯ではないかと筆者は考えている。現在、この地名は使われていない。

ot čiq-. この ot は「草」の意。現代カザフ語には šöp と表記される場合が多い。

Bofi taji. ボフはアブルフェイズの第三子。文語カザフ語文書では、カザフのハン一族の嫡裔たちが一般に「スルタン」、「トレ」と呼ばれていたが、時に tayji と記される事例もあった。それは漢語の「台吉」の音訳であり、清朝から与えられた爵位である。

(9) teli tentäk. 「紛争を引き起こす者」、「悪党」の意。

Qarabuqa Bazar. 現在のカザフスタンの Qarabuqa 河と Bazar 河の合流域に当たると考えられる。両河ともタルバガタイ山を源とし、ザイサン湖西南のハラオイで合流してザイサン湖に流れていく。

(10) murun/murīn. カザフ語で「鼻」を指すこの murīn は中ジュズのナイマン部族に属する一ウルウ（子部族）の名前であり、当時、ハンホジャの支配下にあったと考えられる。シャケリム氏の記録によれば、ムルンはサル（ナイマン→ソフ・ミルザ→オクレシ→スグルシエ→キタイ→トレゲタイ→ハラケレイ→バイトル→バイス→サル）の妻に当たり、のちにこのサルの子孫たちが「ムルン」と名付けられるようになったという [Shakerim 2004: 29]。遅くとも 18 世紀後半頃にムルン・ウルウの遊牧地はハラブハ・バザルの両河流域にあったことが文書によって確認できる。

(11) mal. カザフ語の場合、駱駝、馬、牛、羊と山羊などの家畜を指するのが一般的である。

(12) mekān/meken. 「根拠地」、「遊牧地」の意。

(13) zā-u. < ペルシア語。zāwar? 「下僕」の意。

ülkän hānning qara yoli. 直訳するならば、「大ハンの黒い道あるいは大道」となるが、ここで恐らく清朝のカルン線を指していると思われる。

qarāwul/qarawil. 「哨兵」の意。また、哨戒部隊の駐屯基地もこの名で呼ばれ、当該の時代では、ほぼ排他的に清朝の設置した衛所 karun を指す [濱田 2008: 90]。

(15) Mīrzabek aqalaqč/šī. この人物について詳しい情報は得られないが、恐らくハンホジャに仕えていた者で、ムルン・ウルウの有力者であると思われる。職名は aqalaqč/šī (隊商長)。

[印影] Hān Hwāja Bahādur Sulṭān. 印章にはハンホジャ・バハドゥル・スルタンと刻まれたにもかかわらず、ハンホジャが清朝に文書を送った際には、「カザフのハンホジャ王」と記するのが一般的である。

【解説】

文語カザフ文書には、カザフ王ハンホジャが、遊牧地の旱害により家畜が数多く死んだため、弟のボフを根拠地のチンギズ・チャガンに残し、自分がタルバガタイ方面のハラブハ・バザル、すなわち自分の支配下のムルン・ウルウの遊牧地に移動してきたことが記されており、ハンホジャー族がこの時期からザイサン湖方面に移牧し始めたことを物語る。文書には bul yil tupta ot čiqmadī (今年には更に草が生えなかった) と記されているため、ハンホジャが 1790 年秋頃にハラブハ・バザルに移牧してきたと推測される。一方、文書が完成さ

れた日付については一切記されておらず、具体的にいつ書かれたのは不明である。ただし、ハンホジャがハラブハ・バザルに移牧してきたあと、すなわち特成額の奏摺に先立って11月頃に作成されたと判断できる。文書にはまた地名、河川名と部族名に関して情報が含まれており、18世紀後半頃ジェットウスウ地方のカザフ遊牧社会の実態をも探る重要な文書史料と認められると言ってよい。

2 文書の満洲語訳

【転写】

(1) Murušeme ubaliyambume tucibuhe hoise hergen i bithe.
 (2) *Šun i eldeke abkai fejergi be uherilehe (3) *amba enduringge ejen i elhe be baimbi. Labdu aniya, (4) labdu biya. Ihan aniya de dahanjiha ci ebsi, (5) meni sakda asigan albatu, yadahūn ningge bayan (6) oho. Emtelingge juru oho. Meni nuktei gubci (7) gemu elhe taifin i banjimbi. Tarbagatai de kadalara (8) hebei amban, baturu amban i saimbe dacilambi. Labdu (9) aniya, labdu biya. (10) *Amba enduringge ejen i kesi de, mini ama abulbis, (11) wang hanghojo, meni ahūn deo ihan aniya ci (12) ebsi, aniyadari (13) *enduringge ejen i mohon akū kesi be aliha. Meni (14) ahūn deo umesi urgunjeme hengkilembi. Be gemu (15) *ujen kesi be aliha albatu. Ilan aniyai otolo, (16) meni nuktehe cingges cagan i bade hiyaribuha (17) ofi, ongko juken. Ere aniya ongko juken ofi, (18) bopu taiji be tubade bibufi nuktei urse be (19) kadalabume, hasak wang hanghojo bi harbaha badzar de (20) bisire meni tesu murun otok de nuktenjifi, jecen i (21) bade tehe meni niyalma be bargiyatame kadalaki. Ilan (22) aniya ci ebsi cingges cagan i bade ongko juken, (23) ulha gasihiyabuha ofi, harbaha badzar de tuweri (24) hetumbuki seme nuktenjihe. Aniya arafi niyengniyeri (25) forgon de an i cingges cagan de amasi marimbi. (26) Talude meni dursuki akū hasak aika jecen dabame (27) *amba ejen i karun kaici de dosici, bašame tucibufi, (28) amasi unggireo. Te ahalakci mirdzabek i jergi (29) sunja niyalma be takūrafi unggihe.

【翻訳】

(1) [以下は原文書の] 大意を翻訳させた回語文書である。
 (2) 太陽の光、天下を統一した (3) 大聖主の安寧を願う、多年 (4) 多月を通じて。丑年に投降して以来、(5) 我々の老若のアルバト [の中]、貧しいものが豊かに (6) なった。乏しいものが増えた。我々の遊牧地の全 (7) 民は平安に暮らしている。タルバガタイを管理する (8) 参贊大臣、バトゥル大臣の安寧を尋ねる、多 (9) 年多月を通じて。(10) 大聖主の恩を、父のアブルフェイズ、(11) 王のハンホジャ、我が兄弟は丑年以 (12) 来、毎年、(13) 聖主の限りない恵みを、受け取っていた。我々の (14) 兄弟は非常に喜んで叩頭

をしている。我々みなは (15) 大恩を受け取ったアルバトである。3 年以来, (16) 我々の遊牧していたチンギズ・チャガンは旱害を被り, (17) 遊牧地が荒れた。今年, 遊牧地が〔更に〕荒れたため, (18) ボブ・タイジをそこに残して遊牧地の人々を (19) 管理させ, カザフ王のハンホジャ私は, ハラブハ・バザルに (20) いる我々のもとのムルン・オトク〔の辺り〕に遊牧しに来た。辺境 (21) 地帯に住む我々の人々を治めたい。3 (22) 年以来, チンギズ・チャガンでの遊牧地が荒れ, (23) 家畜が死んだため, ハラブハ・バザルで冬を (24) 過ごしたいと思い, 移牧してきた。春の (25) 季節になると, いつも通りチンギズ・チャガンに戻る。(26) 万が一, 我々のみっともないカザフ人が辺境を越え, (27) 大主のカルン線に入るならば, 追い出し, (28) 送り出してくれまいか。現在, アカラクシのミルザベクなどの (29) 5 人を派遣した。

【注釈】

(1) hoise hergen i bithe. 回語文書もしくはアラビア文字文語チュルク語文書。18 世紀文語カザフ語文書のうち, この用語が musulmānča と記録された文書も存在しており, この時代, 文語カザフ語を含む中央アジアにおけるアラビア文字文語チュルク語は単に「ムスルマン語」と呼び慣らされていたと考えられる。

(4) ihan aniya de dahanjiha ci ebsi. ここの dahanjiha ci ebsi は原文書での törämiz ul bolğalı, qaramiz qul bolğalı に当たる。

(5) meni sakda asigan albatu. この文は原文書には表現されていない。

(10) amba enduringge ejen i kesi. これは原文書での bogda ezin hānning qayrani に当たる。当時, カザフ側も enduringge ejen (清朝皇帝) を bogda ezin hān と呼んでいた。Kesi は前述のように清朝皇帝の恩沢あるいは賜物の qayran を指す。

abulbis. 右部カザフの王アブルフェイズの満洲語表記。

(11) wang hanghojo. カザフ王ハンホジャの満洲語表記。興味深いことに, ハンホジャは文書の中で menki qaзақ Hān Hwāja wang と自分のことを強調しているように見られるが, 満洲語訳ではそのニュアンスが反映されていない。一方, 満洲語文書には職名が人名の前に表記されるのに比して, 文語カザフ語文書では, 逆に人名の後ろに記されている。

(13) enduringge ejen i mohon akū kesi be aliha. ここの mohon akū kesi は原文書での köp qayranlar の満洲語訳であるが, カザフ語の köp と満洲語の mohon akū は同義語ではない。他に, 未完了継続形を意味する tigip tura dur という文面が満洲語訳では完了終止形を表す aliha によって表現されている。

(14) be gemu ujen kesi be aliha albatu. これは原文書の bu ülkän dawlatga qačanda bolsä hizmatkärmiz. というセンテンスの満洲語訳であるが, やや異なっているように思われる。Albatu は「属民」, 「臣民」を指すモンゴル語。

(16) cingges cagan. Činggiz Čagan の満洲語表記。

(18) bopu taiji. ボブの名前が原文書には Bofi と記されるのは一般的であるが, 満洲語の

場合, bopu に統一されている。

nuktei urse. 満洲語訳では、「遊牧地の衆人」になっているが、ハンホジャ、ボプ・タイジが指している者たちは遊牧民の全員ではなく、teli tentäk（紛争を引き起こす者）のみである。

(19) harbaha badzar. Qarabuqa Bazar の満洲語表記。

(20) murun otok. ムルン・ウルウの満洲語表記。ここに現れる otok とは、モンゴルの遊牧集団の単位 otog の満洲語綴りであり、清代の満文・漢文史料では、カザフ遊牧民に対しても同様の名称が用いられていた。Otok はそもそも、ソグド文化語に遡る中央アジア語群に属し、紀元後の千年間を通じて中央アジアに分布していたイラン語系のソグド語では、オターク ötäk という言葉は「国土」、「地域」を意味するものであった [ウラヂミルツォフ 1980 : 301]。次いでこの語は、テュルク系諸語や、モンゴル語などのアルタイ語系の諸言語に各種の形で現れるようになり、カザフ語で「連合体」を表す odag もこの語に由来すると十分考えられる。しかし、カザフ語の odag はモンゴル語のように遊牧集団の単位を示すものではなかった。

(21) meni niyalma. これも上記のように「われらの人々」になっているが、実際には紛争を引き起こす teli tentäk である。

(23) harbaha badzar de tuweri hetumbuki seme nuktenjihe. 「ハラブハ・バザルに越冬したいと遊牧しにきた」となっているが、もともとは Qarabuqa Bazarga kelip, šu Qarabuqa Bazarni mekän qilip turdum (ハラブハ・バザルに [移牧して] きて、ハラブハ・バザルを根拠地に使っていた) とあり、越冬のためだけではない。

(24) aniya arafi niyengniyeri forgon de. ここでは「春の季節になると」と訳されているが、原文書では、yaz bolsa (夏になると) と記されており、訳文における季節に対する認識は異なっている。

(27) amba ejen i karun kaici. これは原文書の ülkän hānning qara yoli (大ハンの大道) に当たる。すなわちカザフと清朝の間に設けられた諸カルンを示す。

(28) ahalakci mirdzabek. 原文書の Mirzabek aqalaqči の満洲語表記。

【解説】

これは、ハンホジャの使者らがチュグチャクに持っていった文語カザフ語文書をもとに満洲語に翻訳されたものである。翻訳された日付について明確な情報はないが、恐らくハンホジャの使者らが代理タルバガタイ参贊大臣に文書を渡した直後に訳されたと考えられる。

II ハンホジャ宛返書

【転写】

(1) Hasak wang Hanghojo de afabuha bithei jise.
 (2) Tarbagatai de tefi baita icihiyara daiselaha (3) hebei amban i bithe, hasak wang hanghojo de (4) afabuha. Wang sini beye saiyūn, nuktei urse (5) gemu saiyūn. Jaka sini baci taiji jolci i (6) jui adai, ahalakci mirdzabek sebe takūrafi (7) hoton de jifi, bi acafi fonjici, ere aniya (8) suweni nuktehe cingges cagan i bade ongko umesi (9) juken ofi, wang si suweni tesu murun otok i (10) hasak sai nuktere harbaha badzar sere bade (11) tuweri hetumbume jihe babe, cohome bithe arafi, (12) cembe takūarfi meni saimbe fonjime bithe alibume (13) jihe. Jai umai gūwa baita akū seme alahabi. (14) Sini alibuha bithe be tuwaci, ilan aniya otolo, (15) suweni cingges cagan i bade ongko juken, ulha (16) gasihiyabuha turgunde, sini deo bopu be cingges de (17) bibufi, tubai nuktei urse be kadalabume, sini beye (18) suweni tesu murun otok i hasak sai nuktere (19) harbaha badzar de tuweri hetumbume nuktenjifi, (20) jecen i bade tehe hasak be bargiyatame kadalame, (21) aniya arafi niyengniyeri forgon de kemuni an i (22) amasi cingges cagan de marimbi. Talude dursuki (23) akū hasak sa, aika meni karun kaici de (24) dosirengge bici, bašame tucibureo sere jergi (25) gisun i arahabi. Te wang sini beye meni (26) jecen i hanci jihe ofi, meni baci u galai (27) da be tucibufi, harbaha badzar de genefi, wang (28) simbe acaha. Wang sini alaha ere gisun be (29) meni u galai da jifi anan i gemu kimcime (30) akūmbume minde alaha. Te wang sini beye (31) suweni murun otok de tuweri hetumbume jifi, (32) muse giyalabuhangge ele hanci oho. Si kemuni (33) jecen i bade nuktehe suweni geren hasak be (34) bargiyatame kadalaki sehengge. Wang si yargiyan i (35) *amba enduringge ejen i kesi be hukšeme umesi ginggun (36) ijishūn i yabuhabi. Bi inu labdu urgunjembu. (37) Wang si damu cembe urunakū ciralame bargiyatame (38) kadalame, cisui hūlhameme meni karun kaici de (39) dosimburakū obukini. Ere sidende meni baturu amban (40) emgeri geren karun be baicame genehe. Mini baci (41) baturu amban de ulhibufi, tederi meni karun i (42) hafan cooha de selgiyefi, erin akū baicabure (43) oci, ereci jecen i bade heni baita sita akū (44) ombime, wang sini facihyašame yabure babe (45) *amba ejen safi ele simbe sai (ame maktame (46) gosime tuwambi kai. Wang si ereci Julesi (47) ele ginggun ijishūn i gūnin tebume (48) *amba ejen i ujen kesi be karulara be kiceme (49) yabume, enteheme goidata (50) *amba ejen i mohon

akū kesi alire be (52) kiceki. Te mini baci wang sinde afabure (53) bithe arafi, geli wang sini saimbe fonjire (54) doroi sinde bure suje suri fadu i jergi (55) jaka be, suw-aliyame sini takūraha niyalma de (56) afabufi gamabuhabi. Isinaha manggi baicame (57) bargiyakini. Erei jalin afabuha.

【翻訳】

(1) [以下は] カザフ王ハンホジャに送った文書の草稿である。

(2) タルバガタイで官に就いて事務を処理する代理 (3) 参贊大臣の文書で、カザフ王のハンホジャに (4) 送った。王よ、お前は健康に過ごしているか？ 遊牧地の人々 (5) みな健康に過ごしているか？ お前のところからジョチ・タイジの (6) 子アダイ、アカラクシのミルザベクなどが遣わされ、(7) [彼らは我が] 城に来た。私が会見して聞いたところ、今年、(8) お前たちが遊牧していたチンギズ・チャガンの遊牧地が非常に (9) 荒れたため、王よ、お前が、お前たちのもとのムルン・オトクの (10) カザフ人たちが遊牧しているハラブハ・バザルというところに (11) 越冬しに来たことを、特に文書に書いて (12) 彼らを派遣し、我々の安寧を尋ねる文書を上呈させた (13) という。[使者たちは] 他に用件がないと告げた。(14) お前の送らせた文書を見れば、3年以来、(15) お前たちのチンギズ・チャガンの遊牧地が荒れ、家畜が (16) 死んだため、お前の弟、ポップをチンギズ・チャガンに (17) 残して、そこの遊牧地の人々を管理させ、お前自身が、(18) お前たちのもとのムルン・オトクのカザフ人たちが遊牧している (19) ハラブハ・バザルに越冬しに移牧し、(20) 辺境地帯に住むカザフ人を治め、(21) 春の季節になると常にいつも通り (22) チンギズ・チャガンに戻る、万が一、みっともない (23) カザフ人たちが貴方のカルン線に (24) 入っている者がいれば、追い出してくれまいかということが (25) 記されていた。現在、王よ、お前自身が我々の (26) 辺境辺りに来たため、我々のところからウ翼長 (27) を行かせ、[彼が] ハラブハ・バザルに到着し、王 (28) お前に会った。王よ、お前が言ったこの話を (29) われらのウ翼長が来て、順次詳しく (30) 調べて私に告げた。現在、王よ、お前自身は、(31) お前たちのムルン・オトクに越冬しに来て、(32) 我々の間の隔てられた距離は更に短くなった。お前は、常に (33) 辺境地帯で遊牧するお前たちの人々のカザフ人を (34) 治めたいと言っている。王よ、お前は (35) 大聖主の恩を頭に頂き、非常に恪謹で (36) 素直に [恩返しを] 行っている。私はまた、大いに喜ぶ。(37) 王よ、お前はくれぐれも彼らに対して必ず警備を厳重にし、(38) [彼らを] 治め、自らひそかにわれらのカルン線に (39) 入らないように。この間、われらのバトゥル大臣は (40) 既に諸々のカルンを調べに行った。私のところから (41) バトゥル大臣に曉諭させ、そこのわれらの (42) 政府軍に布告して直ちに調べさせる (43) ならば、これから辺境地帯でなんのトラブルも (44) 起こらず、王よ、お前が仕事に一生懸命になっていることを (45) 大エジェンが知り、更にお前を嘉して称賛して (46) 慈しんで見るだろう。王よ、お前はこれから前向きになり、(47) 更に恪謹で素直に意を強くして (48) 大エジェンの重恩に報いることに努め、(49) 久遠に

(50) 大エジェンの限りない恩を受け取ることを (51) 奨励したい。現在、われらのところでお前に送る (52) 文書を書き、また、王よ、お前の健康を尋ねて、(53) お前に賜る緞子、つむぎ、巾着など (54) の品を併せてお前の遣わした人たちに (56) 渡し、持って行かせた。届いたあと、確認して (57) 収めてほしい。この用件のために〔文書を〕交付した。

【注釈】

(2) *daiselaha hebei amban*. ここでは代理タルバガタイ参贊大臣の特成額を指す。

(5) *taiji jolci i jui adai*. アブルフェイズの次子の名前が *Joč/si* であったが、満洲語文書の場合、一般に *Jolci* と表記する。この満洲語文書によれば、彼の子アダイも使節団に加わったが、原文書にはその名前が提示されていない。また、『識略』(哈薩克世次表)でも確認できない。

(7) *hoton*. ここでは綏靖城を指す。チュグチャク(楚呼楚)ともいう。

(26) *u galai da*. <満洲語。翼長、諸地に駐在した章京 [五体, 1458]。U は恐らく翼長の名前の省略であると思われる。

(54) *suje suri fadu*. これらは代理タルバガタイ参贊大臣がハンホジャに送った賜物であり、当時、清朝の辺境官吏らはカザフの使者らが持ってきた貢馬の代わりにこういったものを贈っていた。

【解説】

代理タルバガタイ参贊大臣は、カザフの王ハンホジャが送ってきた文語カザフ語文書を満洲語に訳させると同時に、ハンホジャ宛返書をまず満洲語で作成させ、それを文語カザフ語に翻訳させてハンホジャのもとに送らせたと思われる。本稿で引用したのはその草稿であるが、しかし、ハンホジャへの返書の訳文はいまだ発見されておらず、調査を継続する必要がある。

ところで、この文書は如何に満洲語に、或いは満洲語で作成された返書は如何に文語カザフ語に訳されたのであろうか。翻訳者に当たった者についての情報は一切記されていない。そもそも、カザフからの来文が如何なる手順で満洲語訳、漢訳されたのかについて語ることは極めて困難であり、カザフと清朝間の言語的意思疎通に関する不明な点が、現在まで放置されてきたが、文語カザフ語文書の全体を見る限り、少ないながらもいくつかの重要な情報が提供されている。例えば、アブライがイリ將軍に送った文書の結びに「〔われらのところでは〕カルマク語(トド文字モンゴル語)が出来る者がいない、〔もし、〕過ちが残っているなら、お許しください」と、アブルフェイズがタルバガタイ参贊大臣に、「書簡をお送りくださるならば、必ずムスルマン語(文語テュルク語)で書くようお願いします」に対して、イリ將軍に「カルマク語が出来る者はいなくなりました。もし、書簡をお送りくださるならば、ムスルマン語で書くようお願いします」と記したことが挙げられる。これらの例文から明らかであるように、カザフが清朝と関係を結んだ当初から、中央アジアのテュルク系の人々に

よって「カルマク語」と呼ばれるトド文字モンゴル語で書簡を送っていたことは確実であり、それはカザフとジュンガルの人々が長年混住状態にあったことに起因するであろう。興味深いことに、時代が下るにつれ、カザフからの来文におけるトド文字モンゴル語文書の割合が次第に小さくなっていく。

以上の事情に鑑みるならば、イリ、タルバガタイにある清朝の辺境当局にカザフからの来文を満洲語或いは漢語に訳す者がいたと言わざるを得ない。しかし、翻訳に当たった者はどこの出身者であったのであろうか。彼らは、カザフ語と満洲語・漢語に精通している者であったのであろうか。残念ながら、これについて有力な情報が得られない。唯一想像されるのは、本稿に引用した文書の満洲語訳において翻訳に当たった者は、文語カザフ語文書を直接理解できる者ではなく、換言すれば、文書の内容が平易なカザフ語に言い換えられたあと、その内容を満洲語に翻訳した可能性が高い。従って、例えば、teli tentäk (紛争を引き起こす者) が「カザフの衆人」、yaz bolsa (夏になれば) が「春の季節になれば」と訳されてしまったのであろう。いずれにせよ、このような比較研究は初の試みであり、今後更に検討を進めたい。

参考文献

満文録副：「軍機処満文録副奏摺」（マイクロフィルム）、中国第一歴史檔案館所蔵。

五体：田村実造・今春春秋・佐藤長共編『五体清文鑑訳解』2巻、内陸アジア研究所（京都大学文学部）、1966。

事宜：興肇増補『塔爾巴哈台事宜』、中国方志叢書（西部地方：15）、台北、成文出版社、1969。

目録：中国第一歴史檔案館と人民大学清史研究所及中国社会科学院边疆史地研究中心合編『清代辺境満文檔案目録』第6-11冊（新疆巻1-6）、桂林、広西師範大学出版社、1999。

QT: *Қазақстан тарихы*, 2-том, Алматы: Атамұра баспасы, 1998.

QTQD 2: Сағынтай Сұңғатайұлы қағарлылар құраст, *Қазақстан тарихы туралы қытай деректемелері*, 2-том, Алматы: Дайк-Пресс, 2005.

QTQD 3: Бақыт Еженханұлы құраст, *Қазақстан тарихы туралы қытай деректемелері*, 3-том, Алматы: Дайк-Пресс, 2006.

識略：松筠纂修『欽定新疆識略』（2）、中国辺境叢書（第1輯：11）、台北、文海出版社、1965。

阿力肯・阿吾哈力（2006）一件清代哈薩克租牧地文書的研究『民族研究』5, 70-73.

阿力肯・阿吾哈力（2009）阿布賚汗後的清哈關係——一件清代哈薩克文書的釈読 張定京、阿不都熱西提・亞庫甫（編）『突厥語文学研究——耿世民教授八十華誕紀念文集——』中央民族大学出版社, 21-26.

Düysenäli Äbdiläšimuli (2009) Qazaq güngi Jošining Tarbagatay ambandarına jazğan hatı, *Şinjang qoğamdiq ğilimi* 4, 51-57.

- 濱田正美 (2008) 北京第一歴史檔案館所蔵コーカンド関係文書9種『西南アジア研究』68, 82-111.
- Levshin (1996): Левшин А. И., Описание киргиз-казачьих или киргиз-кайсацких орд и степей, Алматы: Санат.
- Millward, J. A. (1992) Qing Silk-Horse Trade with the Qazaqs in Yili and Tarbaghatai, 1758-1853, *Central and Inner Asian Studies* 7, 1-42.
- Noda, Jin & Takahiro Onuma (2010) A Collection of Documents from the Kazakh Sultans to the Qing Dynasty, *TIAS Central Eurasian Research Series, Special Issue 1*, Department of Islamic Area Studies, Center for Evolving Humanities, The University of Tokyo.
- Pelliot, P. (1960) *Notes critiques d'histoire kalmouke*, Paris.
- 厲 声 (2004) 『哈薩克斯坦及其与中国新疆的關係 (15世紀-20世紀中期)』黒龍江教育出版社.
- 佐口 透 (1963) 『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館.
- 佐口 透 (1986) 『新疆民族史研究』吉川弘文館.
- Shakerim (2004): *Шәкерім Құдайбердіұлы, Түрік, азақ, қырғыз һәм хандар шежіресі*, Алматы: Ол-Жас баспасы.
- ウラヂミルツォフ (1980) 『蒙古社会制度史』(外務省調査部訳) 原書房.
- 宇山智彦 (1999) カザフ民族史再考『地域研究論集』(2) 1, 85-116.

(京都大学大学院文学研究科)